

原 著

## 病者に寄り添うレイツィアの姿

——異常と正常をつなぐ人——

清 水 雅 子

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成9年11月19日受理)

Rezia Shows Us How We can Coexist with Insanity Persons

**Masako SHIMIZU**

*Department of Medical Social Work,  
Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-01, Japan  
(Accepted Nov. 19, 1997)*

**Key words** : sanity, insanity, isolation, abandonment feeling, coexistence

### Abstract

V. Woolf took pains to link the descriptions of insane Septimus' insanity and Clarissa's daily life in *Mrs Dalloway*. Judging from Septimus' symptoms, mainly violent hallucination and apathy, he was apparently suffering from schizophrenia, not from mere neurotic conditions. In addition, Septimus alternated between lunacy and normality. Rezia, his young wife, was also pulled into the isolated existence because she was aware of people's prejudice to mental disease. They visited Sir Bradshaw, a famous doctor in London, and asking for help. He offered no help for their suffering but asked if they could afford 'isolation therapy'. Ironically, Rezia's change occurred just after their visiting him. She experienced the same feeling of abandonment as Septimus. She began to draw close to him and became happy in her communication with him in spite of his unreasonable words and deeds.

We may conclude that V. Woolf gives us a possible picture of a person who can coexist with a mental patient in her description of Rezia. She also succeeded in exposing Clarissa's feelings of depersonalization and anxiety and shows us insanity might be a part of personality.

## 要 約

V. ウルフは、*Mrs Dalloway* において、狂人セプティマスの情景とドロウェイ夫人の情景とをつなぐことに苦心した。セプティマスの病はその主要な症状である激しい幻覚と無感覚から、明らかに精神分裂病であると判断される。レイツィアは彼の異常な言動を理解できず逃避しようとするが、一方では異常の中に正常をかいま見て混乱し、また精神病者を疎外する世間の目を意識して孤立感に苦しみ悩む。彼らは著名な精神科医を訪れるが、彼らの苦悩や悲哀に共感を示さない医師に絶望に近い「見捨てられ感」を覚える。しかしその体験を契機に、レイツィアにセプティマスを狂気もろとも引き受けようとする心的変化が起きる。相互作用によって、セプティマスは病が原因で引き起こされる症状を恐れなくなり、ふたりは正常に会話し、笑い合い、心やすらぐ時を過ごす。結果として、セプティマスは自殺を図ったとはいうものの、彼の死はドロウェイ夫人クラリッサの主催するパーティーの場面で伝えられ、彼女の意識の中で克服され、彼女の生へとつながれていく。このように小説の展開において、レイツィアはセプティマスを異常のままに受容し、彼に寄り添いながら生活することで、正常と異常をつなぐ。またそのような姿は、セプティマスと共に、クラリッサの病的に無感覚な内面に光をあて、彼女の死の意識を生へつなぐ人として機能していると考えられる。そこには、狂気を人間性の一部としてみなす、ウルフ独特の人間観が現れていると言ってよいであろう。

## はじめに

V. ウルフは、*Mrs Dalloway* において、登場人物のとりとめのない意識の流れを描きながら、そこにまとまりと客観性を与えることに悪戦苦闘した。日記に「『ドロウェイ夫人』の狂気の諸章がないほうが本のできがよくあったかどうか……なぜなら狂人の情景とドロウェイ夫人の情景とがつながっていないから」と不安をもらしているように、特に正常と異常というテーマにどのようにつながりをもたせるかに最も苦心を覚えたようである。ウルフは狂気の情景をセプティマスに具象化して、彼の描写をドロウェイ夫人、クラリッサの日常描写と交錯させることによって、彼女の異常ばかりでなく周辺の人々の正常の中の狂気をも浮かび上がらせたのである。そして2つの情景は小説の終盤のパーティーの場面においてドロウェイ夫人の意識の中で合流する。そのプロセスの中でセプティマスの妻レイツィアもまた、正常と異常をつなぐ役割を与えられていると言ってよいであろう。異常な言動をするセプティマスと、精神病者を疎外する世間との間にあって、レイツィアはいずれの側からも理解されない孤立感に苦しむ。しかし彼

女の苦悩と悲哀は、セプティマスの狂気を際立たせると同時にクラリッサの内面にも光をあてて、人間という不可解な存在がもつ暗闇の部分に照らしだす。そこには、人間性の一部としての狂気の情景が表現される。

本稿では、まず作品にとって必然的存在であるセプティマスの病態描写を検討することで、彼とレイツィアが直面する困難な状況を理解する。次に、セプティマスから逃避したい気持ちにかられながらも、彼を世間から守る立場にあって揺れ動き、徐々に彼に寄り添っていくレイツィアの心的状態の変化を追って、ウルフが示唆した正常と異常とのつなぐ可能性と意味を論及、考察する。

## 1 セプティマスの病態描写

## (1) 精神分裂病患者としてのセプティマス

小説が始まるとまもなくセプティマスとレイツィアは登場する。ドロウェイ夫人、クラリッサが花店で花から花へと、美しさと香りと色彩の中を歩んでいるとき、すぐ向いの舗道にやってきた自動車のタイヤから突然爆発音が起きる。自動車を取り巻く群衆のひとりとして登場したセプティマスは、明らかに異常者として次のよ

うに描かれる。

Septimus Warren Smith, aged about thirty, pale-faced, beak-nosed, wearing brown shoes and a shabby overcoat, with hazel eyes which had that look of apprehension in them which makes complete strangers apprehensive too. The world has raised its whip; where will it descend?

And there the motor car stood, with drawn blinds, and upon them a curious pattern like a tree, Septimus thought, and this gradual drawing together of everything to one centre before his eyes, as if some horror had come almost to the surface and was about to burst into flames, terrified him. The world wavered and quivered and threatened to burst into flames. It is I who and blocking the way, he thought. (*Mrs Dalloway*, p. 15. 下線筆者。以下同様)

実在しない「むち」や、「木のような奇妙な柄」は幻覚・幻視という知覚異常、すべてが「焰」に集約する強迫的な恐怖心は感情の障害、「道をふさいでいるのは自分だ」と思う自虐の念は自我意識の障害の表現である。また人に不安を与えるのは彼の服装や顔の特徴でも精神活動そのものでもなく、精神活動が現れやすい目の表情であることは、精神を病んだ人の症状描写として極めて的確である。彼のこのような病態描写は、再び飛行機の「爆音」をきっかけにして重なるように続く。

公園のベンチに座って飛行機の爆音を聞き、空を見上げて、白煙が描く文字を「あんな風におれに合図している。……美を、もっとたくさんの美を、彼に与える意図があることを合図している。」と考えるセプティマスには、思考の異常と飛躍が表現されている。さらにエルムの木が上下し、手招きし、木と自分の体がつながり、音が心の中で聞こえ、周囲の音と統合されて、新しい宗教の誕生を認識するセプティマス、木に神の存在を確信し、雀のさえずりは自分と呼んでいる声であり、音楽が目に見えるセプティ

マスには幻視・幻聴と妄想が、死ぬぞ死ぬぞと声に出し、目をすえ、大声でひとりごとを言う彼には自殺念慮と対話障害が特徴づけられている。このような異常な思路、抑制のない怒りと感情の爆発、幻視・幻聴・妄想などから、彼の病が精神病質でも神経症でもなく、精神病であること、しかももっとも不可解な発現がみられる精神分裂病であるとみなされる。しかしセプティマスのすべてが異常というわけではないことを、決して見逃してはならない。

But Septimus let him think about horrible things, as she could too, if she tried. He had grown stranger and stranger. …… He saw things too — he had seen an old woman's head in the middle of a fern. Yet he could be happy when he chose. They went to Hampton Court on top of a bus, and they were perfectly happy. …… and talked and chattered and laughed, making up stories. Suddenly he said, 'Now we will kill ourselves,' …… But going home he was perfectly quiet — perfectly reasonable. (p. 60)

レイツィアはセプティマスの異常な言動を理解できないで彼を恐れ、逃れたいくなる一方で、異常の中に正常がかいま見えるために、よくなるのではないかという希望を捨てず、彼を見放せず、ひとり困惑し、混乱する。この異常と正常が交錯するセプティマスの情景描写は、この後助けを求めてふたりが医師ブラッドショーを訪れた時にも、彼の自殺の直前レイツィアと対話を交わし、ひとときの安らぎを感じる時にも書かれている。それらから、病者の存在すべてが狂気というわけではない、というウルフの狂気に対する視点を知ることができる。

次に、彼のもう一つの症状—「感じがない」という無感覚・無感動症状—を発病の原因と併せて見る。

- (2) 「感じがない」症状—発病のひきがねとなった「弾丸破裂音」

既に明らかのように「起爆音」はセプティマ

スの異常を小説に導入する機能を果たしている。その音は、小説の流れにおいて互いに無関係なロンドンの人々をつなぎ、クラリッサの情景とセプティマスの情景とをつなぐと同時に、セプティマスの現在と発病前とをつないでいく。冒頭部の自動車のタイヤから出た「爆音」、飛行機の爆音は、彼の発病の引き金となった戦争中の弾丸爆発の場面につながり、それ以前の上官エヴァンズの戦死、さらに少年時代とロンドンでの生活体験にまで時を遡る。

戦争中、男性的に成長した彼は、上官エヴァンズとホモセクシュアルな愛情関係をもつが、終戦直前にエヴァンズが戦死した時は、彼は冷静であることをありがたいと思う理性があった。弾丸が自分の側で爆発した時も冷静であった。ところが、終戦後レイツィアと婚約した晩初めて「感じがない」という無感覚症状を自覚する。

彼の発病の遠因を、嘘つきで口うるさい母親に育てられたという生育歴や、どこか弱々しく孤独癖があった気質にまで遡って見いだすこともできる。しかし、ウォレン・スミス・セプティマスという風変わりな名前ではあったけれど、母親の束縛を逃れてロンドンへ家出をした少年であったけれども、彼はいつか世に出ることを夢見る向上心の強い普通の若者であった。彼の野心、理想、情熱、怠惰などは、誰もがもつ程度の心情であって、文学好きも若い感受性の表れであった。この普通の青年は、シェイクスピアの講義をするポール女史に通過儀礼的な恋をする。真面目な性格で勤務先の支配人に気に入られ、そのうち安定したポストにつくはずであった。戦争はそのような平凡な青年の未来を奪った。非人間的な戦争体験が彼の内部で何かを破壊し、発病の素地を形成し、弾丸の炸裂音はその引き金となったとみることができる。結婚し、復職し、優雅な生活を始めた彼に、弾丸の炸裂音で受けたショックが少し時間を経て現れ、「感じがない」という症状をもたらしたのである。

…… he could not feel. He could reason; he could read. Dante for example, quite easily … he could add up his bill; his brain was

perfect; …… (p. 79)

見ても、聞いても、食べても「感じがない」症状は、セプティマスの生活、思考、行動にじわじわと浸透して、幻聴、幻視へと発展していく。かつて彼を夢中にさせたシェイクスピアやゲーテから逆に嫌悪、憎しみ、絶望が引き出される。19才の帽子女工のレイツィアと結婚するが、子供が欲しいと訴えるレイツィアに何も感じられない。

以上のように、セプティマスとレイツィアは狂気という病気に直面し、極めて困難な状況に追い込まれる。中でも、レイツィアはセプティマスの変貌を十分理解できず、また自分達を取りまく世間の目を意識し、孤立感と焦燥感に苦しむ。

## 2 レイツィアの孤立感

先に述べたように、レイツィアは、セプティマスの狂気から逃れることも共存することも出来ず、また世間の人々に彼の病気を隠そうとして苦しむのである。そのような彼女の二重の意味での孤立感は、小説冒頭部、爆発音を出して停まった、高貴な方が乗っておられるらしい自動車を見守る群衆に、彼女は相反する感情をもつことから明らかである。

People must notice; people must see. People, she thought, looking at the crowd staring at the motor car; the English people, with their children and their horses and their clothes, which she admired in a way; but they were 'people' now, because Septimus had said, 'I will kill myself; an awful thing to say. Suppose they had heard him? She looked at the crowd. Help, help! she wanted to cry out to butchers' boys and women. Help! (p. 16)

ひとつはセプティマスの異常を誰にも知られたくないという感情。それは、人々が向ける好奇と非難の目が自分にも向けられている、と感じとってしまう病者の家族に共通する心情に由来する。既にセプティマスの病態から推論したよ

うに、彼の異常は精神分裂病と同等される。この疾患の病理は、医学の進歩した現代においても完全に明らかにされていない。おそらく、いくつかの複数の精神疾患が「精神分裂病」と大雑把にひとくりにされて呼ばれているのであるが、病者が見せる多彩な症状は、精神医学の領域ばかりでなく、人間の精神構造と活動に関心をもつ人々の心を引きつけて止まない。しかし、薬物療法が進み、適切な治療を施せばかなりの改善が見られる現代でも、その病気を背負った人を取り巻く社会は必ずしも病者に理解を示さず、むしろ好奇や不安や恐れ、感情から偏見と差別を投げかける。まして、第1次大戦直後が舞台である *Mrs Dalloway* の時代、社会の目は決して暖かいものではなかったであろう。少なくともレイツィアの言葉からは、ロンドン市民は良識ある人々であるがゆえに、セプティマスの振る舞いや独り言は了承しないであろうと彼女が恐れたことが窺える。また、イタリア人のレイツィアが、セプティマスの発病後も郷里へ帰らず、大都会ロンドンに住み続けたのは、彼女にとっては、親や姉でさえも精神の病に對峙する世間という側の人間を意味したためであろう。したがって群衆は、レイツィアにとっては「石を投げつける」世間を意味し、彼女はそこから逃げようとする。一方で、「助けて！助けて！」と群衆に救いを求めて叫びたくなる感情は、精神病患者と共に生きる運命共同体としての足枷から逃避したいという心情に由来する。リージェント公園で、「ひどい、なぜわたしが苦しまなくてはいけないの」と何度も繰り返されるレイツィアのひとりごと、答えのない自問の末の「そのセプティマスは、もうセプティマスではないのだ」という現実認識は、精神を病む人の身内に共通する。それらは、周囲の人にも理解や援助を求めることのできない持って行き場のない性質のものである。世間とセプティマスとの狭間に立って受ける彼女の痛ましい苦痛が、次のように「なぜ」を反復して描写される。

But Lucrezia Warren Smith was saying to herself, It's wicked; why should I suffer? …… but why should she be exposed? Why not left

in Milan? Why tortured? Why?

Slightly waved by tears, the broad path, the nurse, the man in grey, the perambulator, rose and fell before her eyes. …… She was exposed; she was surrounded by the enormous trees, vast clouds of an indifferent world, exposed; tortured; and why should she suffer? (pp. 59—60)

結婚して4, 5年しかならない24才の彼女には、体を丸め、何かを見据えて、自分には見えない何かに向かって話し続け、「自殺するよ」と声を出して言う夫に付き添うことは困難で酷な要求であった。故郷のミラノを離れて大都会のロンドンで途方にくれる彼女が、ある時は世間の一人となってセプティマスから逃れたい、無関係になりたいと願うのも当然である。しかし孤立し、苦しんでいるのはレイツィアだけではない。セプティマスはレイツィアの苦しみと性質は違って、病気そのものに苦しみ、恐怖の真っ只中にいるのである。そしてかつて愛したエヴァンズが死者たちと花の間から現れ、歌いながら近づいてくる幻覚に恐怖する。

He lay back in his chair, exhausted but upheld. He lay resting, waiting, before he again interpreted, with effort, with agony, to mankind. …… I went under the sea. I have been dead, …… He sang. Evans answered from behind the tree. The dead were in Thessaly, Evans sang, among the orchids. …… ‘For God’s sake don’t come!’ Septimus cried out. For he could not look upon the dead. (p. 62—63)

病気が原因の彼の苦痛は、おそらくすべての精神を病む人々に共通する「死んだ方がまし」という恐るべき苦痛であるに違いない。このようなふたりが病院、つまり医師に助けを求め、苦境から救い出してくれることを期待したのは自然の成り行きである。

### 3 レイツィアとセプティマスの「見捨てられ感」

見ても、聞いても、食べても「感じがない」症状は、「通りで有蓋列車がごうごうと音をたて、不具の狂人どもの伍列が彼のそばを歩き、うなずき、にっと笑う」ように思われたり、レイツィアがこどもが欲しいと訴え、すすり泣くごとに、一歩ずつ地獄へ落ちて行くような幻聴、幻覚へと発展していく。セプティマスは病気に追い詰められ、レイツィアは彼と世間との間で追い詰められて、2人の医師に、最初は町医者 of ホームズに、そして次に高名な精神科医ブラッドショーに診察を受ける。

不眠や恐怖を訴えるセプティマスを診察した医師ホームズは次のように診断する。

Dr Holmes examined him. There was nothing whatever the matter, …… he brushed it all aside — headaches, sleeplessness, fears, dreams — nerve symptoms and nothing more, he said. (p. 81—82)

この時点でセプティマスは明らかに幻視、幻聴を見ているのだから、医師ホームズの言う「神経症状」という診断は、かなり楽観的である。しかしそれはホームズが精神病の専門家でないからというわけではないであろう。現在でも精神分裂病の治療は困難なものであるが、ましてこの当時、医師の常識として、治療は不可能であり、セプティマスの予後が精神荒廃に至ることをホームズは知っていたと考えられる。「何も別状ありません」と言ったのは、むしろ、かれらを不幸のどん底に陥らせまいとする医師としての配慮があったかもしれない。そのためか、ホームズはレイツィアを安心させ、希望をもたせはしたが、肝心のセプティマスに不信感を抱かせた。なぜであろうか。次のようなホームズの人物描写からその理由をみつけることができる。

When he felt like that he went to the Music Hall, said Dr Holmes …… Large, fresh-

colored, handsome, flicking his boots, looking in the glass. …… But, he continued, health is largely a matter in our own control. Throw yourself into outside interest; take up some hobby. …… But he would give him something to make him sleep. And if they were rich people, said Dr Holmes, looking ironically round the room, by all means let them go to Harley Street; (p. 81—84)

親切で如才のないホームズの人柄をレイツィアは信頼できる人と思うが、セプティマスには獣のような人間性と感じられる。健康そのものの風貌、びしっとした服装、テンポの早い物言い、すべてが正常な人間性を備えているように見えるホームズに「残虐性」が潜んでいる、と彼は本能的に感じとったのであろう。なぜなら、セプティマスは何をしても「感じがない」という苦しみから解放されないから、夫として妻の願いをかなえられないから、自分で自分をコントロールできないから、助けを求めたのであった。彼は表現しがたい苦しさを理解し、除去してほしかったはずだ。ところが診察の結果、ホームズの提案は要約すれば「何でもないので、何か活動をして気を紛らわしなさい」であった。患者セプティマスの病気とも、苦痛とも、まして人格とも向かい合うことはなかった。「何でもないと」は異常者を異常とみなし、救いようがないと断言したようなものである。存在を無視した慰めに過ぎないようなホームズの診察は、精神病患者の症状に多かれ少なかれみられる「置き去られ感」や「見捨てられ感」をセプティマスにも覚えさせる。

ホームズの描写に暗示されている「正常の中の残虐性」は、著名な精神科医師、サー・ウィリアム・ブラッドショーにより明確に現わされている。うでも優れている彼はセプティマスを一見しただけで重症であると判断する。

…… the reputation (of the utmost importance in dealing with nerve cases) not merely of lightning skill and almost infallible accuracy in diagnosis, but of sympathy; tact; under-

standing of the human soul. He could see the first moment they came into the room …… ; it was a case of extreme gravity. It was a case of complete breakdown—complete physical and nervous breakdown, with every symptom in an advanced stage, he ascertained in two or three minutes …… (p. 85)

医師ブラッドショーは、経験豊富な医師の例に違わず、患者の表情、動作から即座にセプティマスの症状を見抜いたが、セプティマスとレイツィアを前にして4番目の質問で「ですから、何も気になることはない、経済的心配も何もないのですね」とホームズと全く同じことを確認した上で、静かな土地での隔離療法を勧める。彼にとって「結局、神経系統、人間の頭脳は何も分からない。健康とは均衡を意味するのだから、患者には均衡の観念を呼び起こすために、刺激を避けて、沈黙と孤独のうちに休息させるのだ。」という考えに従って、セプティマスに大都会ロンドンを離れて静かな環境で落ち着きを取りもどす隔離治療を提案したのである。そのためにはお金が何よりも必要であるのももつともである。しかしホームズが「お金持ちだったら」という条件づきで紹介しただけあって、ブラッドショーは「しごく当然に請求した高額の金を支払う余裕のある富裕な苦悩する人々」ならば令夫人を伴って、どんなに遠くても車で往診をする医者である。またブラッドショー夫妻はやりくりし、不安に耐え、医師という職業を愛し、勤勉と才能とで人々の尊敬とサーの地位を勝ち取ったのである。有能で多くの患者をかかえたブラッドショーの治療と人生における信条であり、彼と一心同体のようなブラッドショー令夫人の主義でもある「均衡がとれていること」は、一見極めて正常である。しかしブラッドショー夫妻の正常にはホームズ以上に残虐性が潜んでいる。なぜならかれらは富と名声を得ようとする欲望に従って患者を支配し、命令し、強制しているからである。そのブラッドショー夫妻の正常の中の異常は、次のように痛烈な皮肉がこめられて描写されている。

Lady Bradshaw …… now, quick to minister to the craving which lit her husband's eye so oilily for dominion, for power …… Sir Williams was master of his own actions, which the patient was not. …… Naked, defenceless, the exhausted, the friendless received the impress of Sir William's will. He swooped; he devoured. He shut people up. It was this combination of decision and humanity that endeared Sir William so greatly to the relations of his victims. (pp. 90—91)

このようにブラッドショーの的確な診断と治療方針には患者の苦しみを引き受けないという残虐性がある。セプティマスとレイツィアが望んだのは、「お金で解決する6週間の隔離療法」という治療ではなく、助力—患者と家族の苦痛に耳を傾け、理解と共感を示すこと、苦しさを軽減してくれる—であったのだ。希望が適えられなかったレイツィアはブラッドショーに対して、かつてセプティマスがホームズに体験したと同様の絶望に近い「見捨てられ感」を味わう。

'Trust everything to me' he said, and dismissed them. Never, never had Rezia felt such agony in her life! She had asked for help and been deserted! He had failed them! Sir William Bradshaw was not a nice man.

The upkeep of that motor car alone must cost him quite a lot, said Septimus, when they got out into the street. (p. 88)

40年のキャリアをもつ医師ホームズにも、サーの称号を与えられたブラッドショーにも病気や病者への理解が皆無であったはずはないであろう。ウルフがホームズもブラッドショーをも非常に冷淡に扱っているのは、自ら精神を病んだウルフの体験が投影されていると推測されるが、小説の中では、狂気をめぐって、異常を人間性から排除する立場に属するタイプとして描かれていると考えた方がよいであろう。

#### 4 セプティマスを「引き受ける」レイツィア

世の中ばかりか、医師にも見捨てられたと感じたセプティマスとレイツィアに、不思議なことにこれまでにない安らぎが訪れる。まず彼の心にひとつの変化が現れる。

Fear no more, says the heart in the body; fear no more. (p. 124)

セプティマスは怖がらなくなったからといって、病状が良化したのではない。変わらず興奮の発作を起こし、死んだエヴァンズの歌声が聞こえたり、焔の中に落ち込んでいくような実感を覚える。けれども病気によって起きるそのような症状を恐れなくなったのである。こわごわながらも目の前のレイツィアや物を直視する勇気が生まれてくる。それに呼応するようにレイツィアにも大きな変化が現れる。セプティマスの狂気を理解できないけれどもそこから逃避しようとしなくなる。彼が幻覚を訴えても恐れなくなる。たとえ彼が焔が見えるかと捜し回っても、「それは夢よ」と言葉をかけて落ち着かせる。幻視・幻聴を書きとめるようにという人は夫ではない、と思いながらも彼の望むままに筆記する。しかも、その表現のいくつかをとても美しいと思い、それを保管しようとする。レイツィアが異常を異常として受け止めながら、異常の中に正常を、美さえも見いだすことができたのである。

もうひとつの重要な変化は、二人の間に正常な会話が回復し、笑い合えるようになったことである。病気に伴って起きる不眠、頭痛、幻覚に苦しみ、恐怖していたセプティマスと、彼の苦しさを理解できず、世間の目を気にして孤立感に苦しんでいたレイツィアからは思いもかけなかったであろう変化である。

'It's too small for Mrs Peters,' said Septimus.

For the first time for days he was speaking as he used to do! Of course it was - absurdly small, she said. But Mrs Peters had chosen it.

'There,' she said, pinning a rose to one side of the hat. Never had she felt so happy! Never in her life! But that was still more ridiculous, Septimus said. Now the poor woman looked like a pig at a fair. (Nobody ever made her laugh as Septimus did.)

What had she got in her work-box? . . . . He began putting odd colours together - for though he had no fingers, could not even do up a parcel, he had a wonderful eye, and often he was right, sometimes absurd, of course, but sometimes wonderfully right. (p. 127)

かれらの会話は正常範囲内でユーモアさえ醸し出される。このようなふたりの変化はどちらが先に起きたとも判断はできない。おそらくお互いの心的状況が影響しあって同時に生じたのであろうが、医師から見捨てられたという感覚が、特にレイツィアに運命共同体としてのセプティマスを意識させ、変化を促したのではなからうか。

また、彼らの会話が帽子作りという具体的な作業を媒体にしている点は重要である。結婚するまで帽子作りがレイツィアには生活の中心であり、楽しみであり、街を歩いても自然に帽子に目がとまり、あれこれとセプティマス相手に批評したものであった。彼女の生きがいであり、習性の一部とも言える帽子作りにセプティマスが関心を示したことは、彼女に幸せな感情をもたらし、彼にとっても作業療法的な意味を与え、それがふたりに一体感を生み出したと考えられる。帽子を作っているレイツィアの傍らで、彼は異常と正常の状態を行きつ戻りつしながら、「このあたたかい場所で、この静止した空気のかたまりで待とう」と考え、「とても幸せな気分になり、眠ろう」と思う一瞬が訪れる。このような一体感の中で、レイツィアはセプティマスと彼の病気を「受容」し、もはや彼の狂気から逃げようとせず、むしろ彼の側に立って世間から彼を護ろうとする。

Even if they took him, she said, she would go with him. They could not separate them



against their wills, she said. (p. 131)

セプティマスを護る心境に至ったレイツィアは、したがって、彼が嫌がり、その状態に悪い影響を及ぼすであろうホームズを遠ざけようとする。「いえ、主人の診察は、わたしが許しません。」と遮る彼女の強さと「友人としてきたのだ」「怖がっているの？」言いながら、診察に固執するホームズの強引さとは対照的である。

ホームズは、セプティマスが自分とブラッドショーを同一視し、強制、支配、攻撃を脅迫的に感じたこと、自分の足音を聞くと即座にナイフ、ガス、髭剃りと自殺の方法を思い回らし、残された手段が飛び降り自殺であったこと、自分がドアの前に立つまで、「最後の瞬間まで待とう。死にたくはないから。人生はよいものだ。」と生への執着を残していたこと、自分が彼を追い詰めたことを決して思い至らないであろう。なぜなら、彼は正常という側に立ったままで異常者に「なければならない、なければならない」と権力を行使するブラッドショーと同質のタイプの人間であるからだ。セプティマスが飛び降りた瞬間に叫んだ「卑怯者！」ということば、「突然の衝動的自殺で、だれも少しも悪くない。いったいどうしてこういうことを仕出かしたのか」という疑問がそのことを言い表している。

一方、結果的に、自殺をくい止めることはできなかったとは言うものの、レイツィアはセプティマスに安らぎ、笑いをもたらし、「待とう」と耐える気持ちにさせ、人生はよいものだ、生を肯定的に受け止めさせることが出来たのである。このように狂者に寄り添いながら、見守り、生を楽しむレイツィアの姿には、了解困難に思える精神を病む人との共存が示唆されると言えよう。

### 結び—「狂気も人間性の一部である」 と伝えるレイツィア

いつの時代でも、病む人を、ことに精神を病む人を身近かにもつ家族の苦しみや悲しみや嘆きは変わることはないであろう。最も苦しいのは当の病者であるに違いないのだが、家族は病者とは違った意味で悲嘆にくれて悩み、苦しむ

のである。彼らは、発病前とは別人のような病者の変わりようを嘆き、理解を越えた発言や行動にとまどい、なぜ自分がそのような人を見る役目を負わされるのかと自問し、苦しみ、そして解放されたいと願うものである。また「偏見」と「差別」を露にする世間と病者との間で闘わねばならない。レイツィアもその例外ではない。

これまで見てきたように、彼女はセプティマスから逃避したい気持ちにかられながらも、彼を世間から守る立場にあって揺れ動き、徐々に彼に寄り添っていく。ブラッドショー医師を訪問後、セプティマスの病的な「見捨てられ感」と同質の体験をきっかけに、狂気を了解出来ないながらも、彼をそのまま受容し、引き受ける。そこには、異常と正常が交錯するセプティマスの情景描写と併せて、異常を正常と対立するものではなく、人間性の一部とみなすウルフの希有な狂気観が現れている。

本稿冒頭に指摘したように、ウルフは、*Mrs Dalloway* を執筆中、狂人の情景とダロウェイ夫人の情景をつなぎ、小説にまとまりと客観性を与えることに苦心した。レイツィアの悲哀はセプティマスの狂気を際立たせ、同時に彼の苦悩を共有することで、異常と正常をつなぐ可能性を示している。また小説の流れの中で、レイツィアは体位法で書かれたクラリッサとセプティマスの場面をつなぐ役割をも果たしている。

*Mrs Dalloway* の基調は、冒頭部、主人公クラリッサが飛び出した六月の半ばのロンドンの爽やかさ、戦争が終わったという解放感である。セント・マーガレット教会の鐘の音は、平和のシンボルのように鳴り響き、クラリッサに彼女に生の瞬間を意識させ、彼女と人々の意識をつないでいく。一方で、セプティマスの戦争体験と発病はもう一つの基調を形成し、おだやかな時の流れの中に影を落とし、クラリッサの心に生じる不安と動揺、憎しみや嫌悪の感情とつながる。明らかにセプティマスは描かれざるクラリッサの影の部分である。クラリッサにも「感じがない」自覚があり、周辺の出来事や人々から切り離されているという病的離人感にとらわれる瞬間がある。周辺の人達も彼女自身も自分を精神的に異常とはみていないが、セプティマ

スとの共通性から精神病質であると判断される。ウルフはセプティマスの異常と、異常を内包しながら微妙なバランスを保って生きているクラリッサの正常とを対位法で書きながら、異常の中に正常を、正常の中に異常を取り込んでいくのである。そしてセプティマスとの生命の接触からも、社会からも途絶されたいわば「エグザイル」としてのレイツィアの苦悶は、セプティマスの狂気と、病的な素因を内在させているクラリッサの内面にも光をあてて、異常と正常の

2つの情景をつなぐのである。

*Mrs Dalloway* の前に書かれた短編, *Mrs Dalloway on the Bond-street* には狂人が登場しない事実と比較しても、セプティマスの狂気の場面、妻レイツィアの苦悶と孤立感の描写、セプティマスと帽子を作りながら話し合い、笑いあう場面がなければ、華やかな上流階級のグロウェイ夫人、クラリッサの意識に潜む異常な内面に光をあて、人間という不可解な存在がもつ暗闇の部分に照らすこともなかったであろう。

#### 文 献

- 1) Woolf V (1873) Edited by Anne Oliver Bell. Assisted by Andrew McNeillie. *The Diary of Virginia Woolf Volume Two* 1920-1924, A Harvest Book Haircourt Brace & Company, London.
- 2) Woolf V. (1988) *Mrs Dalloway*, A Triad/ Grafton Book, London.
- 3) ヴァージニア・ウルフ, 福原麟太郎監修, 近藤いねこ訳 (1976) グロウェイ夫人, みすず書房, 東京.
- 4) 高橋三郎, 大野 祐, 染谷俊幸訳 (1995) DSM-IV 精神疾患と診断の手引き, 医学書院, 東京.
- 5) 新福尚武編 (1984) 精神医学大辞典, 講談社, 東京.
- 6) 加藤正明他編 (1993) 新版精神医学事典, 弘文堂, 東京.